

令和8年度 第6回 揖斐川町学校教育の在り方審議会（議事録概要）

1 日 時 令和8年6月19日（金） <開会>13時30分 <閉会>15時30分

2 場 所 揖斐川町役場（3階）防災対策室

3 出席者

通常会議委員 秋山 晶則（委員長）、佐木 みどり（副委員長）、小林 直樹、
大西 恵子、椿井 昭二、徳永 恵理奈、栗原 利樹、山本 結、
岸 啓司、庄子 寛之、久保田 智也

事 務 局 教育長 香田 静夫、事務局長 所 貴宏、学校教育課長 佐竹 弥生、
学校教育課課長補佐兼総務係長 高橋 由利、
学校教育課課長補佐兼学校教育係長 植山 まりこ

4 次 第

（1）開会挨拶（委員長）

- ・ 前回は、事務局から答申策定の参考となる資料の提示を受けた。これまでの意見聴取の結果も踏まえ、検討のための情報共有ができてきている状況にある。さらに、行政視察・学校訪問が始まっており、先行自治体の取組みにも学びながら、審議会としての一定の結論を示す段階に差し掛かっている。
- ・ 本日は、諮問事項の1点目「揖斐川町における児童生徒数の推移を踏まえた適正規模、適正配置及び必要な教育環境の整備等に関する基本的な方針」について、論点の整理を行う。審議会としての基本的な考え方のたたき台を提示するので、それぞれの論点に沿って意見をいただき、答申策定に向けた方向性を示していきたい。

（2）報 告

○ A L Tとの意見交換会

- ・ 書面にて共有する。

○ 行政視察の報告（「飛騨市学園構想について」）

- ・ 参加した2人の委員より、飛騨市教育委員会への行政視察についての感想を述べる。

委 員：視察後に調べたところ、飛騨市と揖斐川町は人口減少の推移が類似している。そうした状況で、飛騨市では飛騨市学園構想を令和2年度から段階的に進めており、今年度からは第3章と銘打って取り組まれている。この取組みは保育園・小学校・中学校だけでなく、地域や行政、企業も含めた社会全体で、子どもたちが持続可能な社会の担い手となる力を育むことができるように進められているとのことであった。

特徴の1点目として、学校統合を行っていないという点がある。各小中学校の規模は様々で、中には全校生徒が10人程度の小学校もあるが、地域の意見を尊重する姿勢のもと、いずれの地域でも学校統合に向けた意見が出ていないことから学校統合は行っていないとのことだった。2点目に、スクールバスについては、後日調べたところによると、地域の路線バスと兼用しているところも含めて18台整備しているとのことであった。飛騨市と揖斐川町は面積もほぼ同じで、その森林

割合も同様であるが、スクールバスは各地域に行き届いているようである。その話を聞く中で、やはり通学時間は短い方がよいと感じた。

前述のように飛騨市と揖斐川町は立地も環境もよく似た地域だと思われるが、今回の視察を通じて、揖斐川町も小中学校をそれぞれ1校になるよう統合したり、大規模の学校としたりする必要はないのではないかと考えるようになった。多くの予算が必要になることを避ける意味でも、学校を統合しない方向性を考えてもよいのではないかと今は感じている。

委員：飛騨市学園構想の説明を受けて、これは非常に熱量と時間が必要な取組みだと感じるとともに、そうした熱量をいかに町内全体に醸成するのかというところが難しいという感想を抱いた。

最後まで「児童生徒数がこれ以上減った場合はどうするか」という質問もあったが、明確に「統合しない」と答えている姿からは、この環境を維持するために社会全体でできる限りの取組みをするという姿勢を感じ、勉強になった。

(3) 議 事

議第7号 論点整理

- ・ 香田教育長より、論点整理(1)～(5)について説明を行う。

委員：論点整理(1)の基本的な考え方の「学び直しの機会の確保」に書かれている、令和2年の国勢調査の数値は揖斐川町のものか。

教育長：その認識で相違ない。

(4) 意見交流

委員：やはり論点整理(1)の「確かな学力の育成」が柱の一つになると考えるが、その中の「個別最適な学び」や「探究的な学び」のベースとなるのは、今文部科学省も重要視している非認知能力だと思う。この非認知能力を支える要素の一つにレジリエンスという、簡単に言えば困難やストレスに直面した時に適応したり回復したりする能力があるが、この力を育むために必要なものとして「生活リズム」、「失敗と間違いは成長の好機」、そしてZPDともいわれる「発達の最近接領域」の3点が挙げられている。

このレジリエンスを身に付ける観点で考えれば、特に「失敗と間違いは成長の好機」に人との関わりが重要であり、そしてそこで起きた問題を乗り越えるために挑戦することを教員が支えるという点で「発達の最近接領域」も関係することから、やはり仲間集団の育成というものがポイントとなる。このことも、学校教育の在り方を考えるうえで参考になるのではないか。

委員長：非認知能力は世界的にも注目されており、新しい学力観の中にも入ってきている。この力の育成方法は様々にあると思うが、そうした選択肢がある中で結論ありきの議論をするべきではない。一方で、検討時間は限られることと、判断するタイミングを逸すると後に大きな影響が出るということも意識しなければいけない。現状を維持するという判断も選択肢としてはあり得るが、そのことによる影響についてシミュレーションを行い、結果を共有しながら判断することになる。このことは各論の部分の議論になるが、やはりまずは教育の方向性として、これからの教育について必要なポイントは押さえなければならない。揖斐川町という

ベースと、子どもたちがつながっていくことになる様々な世界があるという両面をみながら、こうした方向性を打ち出しておく必要があるのではないか、という考えから、今回の論点整理は行われている。

学校統合の必要性については様々な議論があると思われるが、やはりどの選択にもメリットとデメリットはあるため、配付資料にあるとおりメリットを活かしてデメリットを最小化することを意識することが大切である。今回の論点整理では、住民の意見聴取や人口推計のデータを踏まえながら、集団性ときめ細かな対応の双方を担保できるような案を示している。

委員：飛騨市学園構想を視察した際に教育長と話す機会があり、その中で審議会として1つの案のみに絞らないといけないのか、それでは答申後に町としてその是非を検討することができないのではないかということをお伝えした。結論ありきの議論だったという誤解を招かないためにも、審議会として複数案出すという考え方もよいのではないかと考えている。

関連して、今回の配付資料が公表された場合、統合ありきの議論だと誤解される可能性があると思われるが、この資料は公表されるのか。

教育長：基本的に公表する方向で考えているが、この資料の内容は委員長と事務局とでたたき台となるよう作成したものであり、あくまで決定事項ではないという旨を付して公表する。

委員：今回事務局が示した案について、私は基本的に賛成なのであまり意見がなかったが、だからこそ反対意見を出してもらい検討する必要があると考える。全国的にも今回事務局が出した方向性に進んでいると思うが、地域の反対は確実にある。そうした声を聴いている方から各地域が抱える懸念点を話していただき、それに対してどう回答するのか考えていかなければならない。自分の通っていた学校をなくしてほしくないという思いや、学校がなくなることによってその地域に子どもが住まなくなり、結果として旧町村が消滅する危険性があるため学校を残してほしいという住民感情は当然あり得る。そうした意見に対して町としてどのようなサポートができるのか、例えば、学校の跡地で何らかの活動をすることで、むしろ地域を活性化するという方針を出すこともできるのではないかと考える。

各論の部分について話すと、論点整理（3）については、学校統合の規模は1小1中で、小中学校を同時期に統合する案に賛成である。論点整理（4）については、安全性が確保されている北和中学校を意識しつつ、人口重心になっているところに設置するのがよいのではないかと考える。論点整理（5）については、義務教育学校に賛成で、その他資料2の図に示されている学校は全国にもあまりないものだと思うので、この義務教育学校の中に夜間中学や学びの多様な分教室をつくるという方針で進めていくのがよいと思っている。

こうした考えがあるからこそ、反対意見を積極的に出してもらって検討すべきだと感じている。行政視察の報告でも話があったような懸念点はあると考えられ、飛騨市ができるのだから揖斐川町でも同様のことができるという考えもあり得ると思うので、やはり反対意見を出していただいて議論できるとよい。

委員：今後、さらなる行政視察やシンポジウムを行うにあたって、私たちもおおよその考えを今回決めておいて、そのうえで行わなければ効果が薄くなってしまわないかと考えている。

学校統合の問題は本当に難しいものであり、これまで申し上げてきたように揖斐川町の面積の広さと地域の文化の継承が課題になると考えている。地域の文化については地区集会でも多くの意見をいただいております、飛騨市が学校統合を行わない理由の一つにもこの課題があるのではないかと考えています。これだけ各地域にそれぞれの文化がある揖斐川町で、これまで坂内、藤橋、久瀬、春日の学校を統合してきたということ自体、県内には例がないようなことだと思っている。また、さらにこの問題を難しくしている点として、養基小学校について池田町との関係の中でどうするのかという点、町内の3つの中学校と揖斐高校の連携をどうするのかという点もある。そして、私の思いとしては、県内多くの小中学校を訪問した経験から、例えば、揖斐小学校や谷汲小学校の建物の雰囲気は非常によく、なくすのは非常にもったいないという感情がある。

これらを踏まえて、今の私の個人的な考えとしては、谷汲小学校のところに義務教育学校を設置してはどうか。そして、その結果効果的なものと分かれれば、その時に他の学校でも義務教育学校とするかどうかを検討すればよいのではないかと考えています。もしも学校を統合するのであれば、予算をできる限り抑えつつ中学校を1校にする場合は、北和中学校のあたりが位置的によいように思う。小学校については、人口重心は大和小学校のあたりかもしれないが、例えば、学校統合する場合に使われなくなった小学校の校舎も、学校へ通うことが難しい子どもたちが集まる場所として活用できないかということも考えていた。

最後に、夜間中学については揖斐川町にどの程度のニーズがあるのか疑問があり、予算も必要となる以上、どこまで実施する必要があるのだろうかと思っている。

委員：今の意見に関連して、これまでの住民からの意見聴取の中で、谷汲で小学校と中学校が1校になるとよいという意見があったことを覚えている。私も谷汲は1つの地域として形成されているところだと思うので、そこで義務教育学校を設置してみてもよいように感じている。飛騨市学園構想の視察の中でも、小中学校は分かれているものの中学生が小学生と関わって校種や学年を越えた活動をしているという話があったので、むしろ少人数であればあるほど義務教育学校は成り立つのではないかと考えています。

また、揖斐小学校の話もあったが、私も揖斐小学校の校舎をなくしてしまうのはもったいないのではないかと考える。揖斐小学校の周辺には、スクールバスのターミナル等に活用できそうな土地もある。また、人口重心の話もあったが、北和中学校のあたりまで通うとなると清水や脛永からはかなり遠いので、町全体で学校を1校に統合するのは難しいのではないかと考えています。以上のことを踏まえて、学校統合が可能となるところのみ統合して、小中学校を2～3校ずつに加えて、谷汲には義務教育学校を設置するという発想でもよいだろうと思っている。

委員：今回の論点とは異なるかもしれないが、答申として最終的にどのように決めるのかということが気になっている。それぞれの意見がある一方で数値的な根拠を示すことは難しいと思うので、意見をまとめる困難さも論点になるのではないかと考えています。学校統合については、論点整理（3）に小学校を段階的に統合する案が書かれていたが、前段階として実験的な取り組みをしてはどうか。現在は小学校と中学校が一緒に何らかの取り組みをするということも行われていないと思うので、一緒に行う授業を年に数回実施するなどといったことをやってみてもよいと考える。

- 委員：学校統合について、現在大きな問題もなく通学できている子どもにとっては、子ども同士の関わりの中で何かを得たり自分のことが理解できたりするという点でよいことだと思う。
- 一方で、学校を統合した場合に、学習面や人間関係で難しさを抱えている子どもたちに対してどのようにきめ細かく対応していくかが難しいと感じているので、配付資料のその他資料2の図で学びの多様化分教室が一緒になっているのは非常によいと思っている。今は難しさを抱えている子どもとそうでない子どもが二極化しているが、子どもたちの中にも日々変化があるため、明確に分けてしまうのではなく学び方を選択できる環境がつくられて、さらにそのことで周囲が偏見をもつことのない、壁のない多様化した学校ができるととてもよいと考えている。
- 委員：学校統合について、1小1中で同時期の統合という案に賛成である。また、今の学びの多様化や学び方を選択できる環境という意見について、実際の運用には別途議論が必要だとは思っているものの、非常によいことだと考える。やはりそうした様々な展開を一つの学校で行うためには、一定程度の規模が必要なのではないか。
- 委員：昨年度の幼稚園保護者からの意見聴取では、いずれの園においても多様な友人関係や集団活動の充実、クラス替えの可否という観点から、現状よりも規模が大きな学校で子どもを育てたいという意見があった。自分の通っていた学校がなくなることは皆様気になる場所ではあると思うが、やはり大事な子どもの成長のためには、学校統合も意義のあるものだと考える。そのうえで、やはり子どもたちには安心して学び、友達との関わりを深めながら、今後も健やかに成長できる教育環境が整えられることが最も大切だという思いである。
- 委員：学校数やその形態といった細かいところはさらなる議論が必要だと思うが、全体を通じて、何らかの学校統合が必要だという方向性は共通する認識のように感じた。そうすると、恐らく次回以降、学校を統合した場合のデメリットをいかに解決するかというところまで整理することになると考える。先ほど揖斐小学校と谷汲小学校の校舎の写真を見せていただいたが非常に素敵で、なくしてはいけないものだと感じた。例えば、全国的には統合後の校舎跡に企業を誘致したり、民間によるスポーツクラブやキャンプ場として活用したりすることで、それまで以上に活性化している事例もある。そうした事例も事務局に調べていただいて、学校統合によって地域が衰退するのではなく活性化する方策も考えているということを示すことで、住民の方の理解を得られるような説明が必要である。
- また、先ほどの意見にもあった保護者の意見というものが一番説得力のあるものだと思っており、これから子どもを通わせる保護者の方々の意見を最も重要視したということが大切になると思われる。さらに、生成AIの普及により学力観が変わってきている。対話力やプレゼンテーション能力も学力と考えるならば、一定程度の規模がなければそうした力を身に付けることはできないと考える。
- 最後に、夜間中学のニーズに関する意見があったが、先日滋賀県の湖南市の夜間中学を視察する機会があった。昨年度開校した時の生徒数は20人ほどだったが、今年度は50人ほど集まっており、その多くは中学校に通えなかった方や外国籍の方とのことだった。夜間中学に通うために人が集まり、学び直しによって地域が活性化するという部分もあるとのことだったので、実際に設置するかどうかはともかく検討する余地はあると考える。

委員長：その他資料2の学校の形態のイメージ図に関連して、子どもたちの多様性を受け止められる環境をつくるということが、これからの方向性の中にも入ってくることになる。また、地域の文化や思いに関する意見もあったが、学校統合する場合の各地域の位置づけがどうなるかについても明確にしなければ合意を得ることは難しく、そのことを十分勘案することも答申に盛り込む必要があると思われる。一方で、学校としてできることとできないことがあり、すべての役割を盛り込もうとすると難しいため、やはり未来を生きる子どもの学習環境という視点を中心に据えて、それとの相関で様々なことを押さえていかなければならない。

本日の議論を通じて、一部の委員から、学校統合の方向性を認めつつも今ある各地域の小学校の存続可能性について留保されている状態だと考える。そのため、改めてその可能性についてシミュレーションを行ったうえで事務局から検討案を出していただき、判断する必要がある。人口動態等についてはすでに共有されているが、段階的に学校統合をする場合の財政への影響など、さらなる情報共有を受けたうえで議論すべきかと思うが、事務局としてはどう考えるか。

教育長：委員の皆様の意見に沿って今後の整理や資料作成をする考えであるため、その方向性で進めていく。

委員：揖斐川町の地域性をどう捉えていくかという観点で、例えば、柳田國男が明治時代に書いた文章にも「揖斐川町」の名前は出てきており、その当時から揖斐川町には、自然や祭りなどといったこの地域にしかないような文化が息づいているような表現がなされている。そうした地域の文化の継承に加え、人口減少や財政上の課題も現実にある。そうした学校統合のデメリットをいかに解決するか考える必要があるとの意見があったが、私も様々な人の思いの中で、どのようにデメリットを解決するのかを考えながら次のステップに進む必要があると感じている。

委員：私が揖斐川町に移住した際に決め手になったこととして、先生たちのきめ細かな指導がある。一番驚いたのは校長先生が全校生徒全員の名前を呼ぶことができるということで、都会ではそのようなことはありえないので、そうしたきめ細かさがよいと感じて移住した。学校教育の在り方を考えるうえで大切なのは論点整理（1）の内容だと思うが、私はこのきめ細かな指導というものを大切にすべきことだと感じている。そして、この論点整理（1）についての考え方が決まれば、論点整理（2）でも様々な選択肢が出てくるのではないかと考えている。

学校統合に関して、論点整理（3）には令和14年以降が適当と書かれている。仮に小学校が1校になった場合、小学生が400人いるならば全校で最低でも12クラス必要となるが、それだけのクラス数を確保できる校舎はあるのか。このことは、中学校でも同様のことが言える。そうなった場合、必要な校舎を建設するのに、どれだけの予算が必要になるのかということをお心配している。

例えば、北方と大和の子どもたちは幼稚園では同じ園に通い、小学校のみ分かれて、再び北和中学校で同じ学校に通うことになる。この是非を考えた時に、この地域で義務教育学校を設置してもよいように思う。また、谷汲では今も1小1中の環境で、その中で様々なつながりをもって魅力的な授業をされていると聞いており、そこで義務教育学校を設置してもよいのではないかと。そして、清水小学校は児童数が減少しており、複式学級も出てきていると聞いているので、その解消にむけて揖斐に義務教育学校を設置する、といったように3校設置するという考

え方もできるのではないか。この考え方であれば、段階的な学校統合をすることについて、校舎の整備に多額の予算をかけずともできる方法がないか検討する余地があるように思われる。

私が子どもの頃は、学校の時間も楽しかったが、放課後の友達との関わりの中で楽しく過ごしながら様々なことを学んでいた。だが、バス通学では放課後に友達と自由に過ごす時間がなくなってしまうため、もしも揖斐川町全体で学校を統合して全員がバス通学となれば、そうした学びはどうなるのか。そういう点では、家庭や地域がいかにデメリットを取り除けるか、ということになると思う。先日の飛騨市学園構想や今後視察する自治体の考え方を組み合わせながら、揖斐川町らしい学校教育の在り方を考えられるとよい。

委員：この審議会へ諮問された際の文言に「実効性のある具体策」と書かれていることから、どこまで踏み込むかはともかく、複数案を出すのではなく審議会としての意思統一をする必要があると思われる。そこで、審議会としてどのあたりのことまで答申すればよいのか、先行事例ではどのように答申しているのかについて教えていただきたい。

教育長：近隣市町の同様の会議での答申としては、整備すべき教育環境の内容や学校数については示したものの、その形態や位置については言及していないものや、学校数や校区について示したものなどがある。それぞれの自治体によっても異なると思うが、我々としてはそのあたりまでは踏み込んでもらいたいと考えている。その内容については今後検討することになるが、具体的な場所や形態についても盛り込んでいただいてもよいので、根拠のある答申になることを望んでいる。

今日の議論を踏まえて補足すると、今回論点整理をするうえで前提としたのは住民アンケートの結果であり、住民の声である。皆様それぞれの意見があると思うが、今後のことを考えるにあたっては、これから児童生徒の保護者となる方の意見を尊重して検討しなければいけないという考えのもとで整理されてはどうか。

今回いただいたご意見について答えると、町内の校舎の規模については、今一番全校児童数が多い小島小学校やかつて児童数が多かった揖斐小学校はキャパシティが比較的大きく、全学年２クラスまでは確保できるのではないかとと思われる。少人数学習教室や教育相談室等、それ以上に教室数が必要となると増築あるいは新築が必要になるが、そのための土地があるかどうかも含め調査する。スクールバスについても、乗降場となるバスヤードの用地となり得る土地に関するご意見があったため、調査したいと考える。財政に関する問題についてはなかなか判断できないところかと思うが、次回の審議会ではご質問に回答できる体制を整えるので、本日いただいたご意見について検討させていただきたい。

(5) その他

○ 第7回審議会（第2回「学校教育の在り方シンポジウム」）

- ・ 教育長より、第2回「学校教育の在り方シンポジウム」について説明を行う。

(6) 閉会挨拶（副委員長）

- ・ 前回の審議会でも出された、「住民アンケートの結果も無碍にはしていないが、学校統合への反対意見をもつ住民の気持ちに寄り添うことが大切である」という意見が印象に残って

いる。学校教育の在り方という非常に大きな問題を取り扱う中で意見を集約することはとても難しいが、互いの意見を傾聴し、尊重しながら議論を深め、時にはまったく新たな視点を取り入れながら、一定の結論を見出す必要がある。今後の答申の策定に向けて、引き続き協力をお願いします。

以上、閉会